

南の海は暴風時を除いてはきわめて平穏であり、観測日表にも0や1がきわめて単調かつ連続に記載されているのが普通であるが、スペクトル解析してこんなに高いピークが表われるなどとは思ってもよらぬことであった。

本文は台風波の研究に関連して南西諸島の範囲にとどめたけれども本土の各地についての研究を計画中である。また単に1962年度にかぎらず、毎年の分を同様な方法で調べて行けば、あるいは黒潮の勢力の変化をみる事ができると期待している。

本報告に関していろいろ御援助いただいた琉球気象庁具志幸孝氏、宮良孫好氏、池間亀一氏、北村伸治氏、城間宏周氏をはじめ所員の方々の御好意に深謝するものである。

参考文献

- 1) R.B. Blackman and J.W. Tukey 1958: The measurement of power spectra Dover
- 2) 日本気象資料, 第1編暴風雨: 中央気象台海洋気象合編(昭和14年)。
- 3) 高橋浩一郎, 1935: 振動体の不規則な運動よりその固有周期と減衰率を求める方法に就きて, 理化学研究所彙報第4巻第4号。
- 4) 気象庁海洋気象観測資料, 1962: No. 31, No. 32.
- 5) 琉球気象台, 気象要覧, 1962: No. 85~No. 96.
- 6) 真鍋大覚, 川勝紀美子 1968: 屋久杉の年輪から解析された古代気象の永年変化と大風の変遷, 九州大学農学部演習林集報第22号, 2月。
- 7) 真鍋大覚, 1968: 玄海灘の海上気象, 5月。

ICSU/IUGG-COMMITEE ON ATMOSPHERIC SCIENCES WORLD METEOROLOGICAL ORGANIZATION

地球大気開発計画研究会議 (GARP) 報告

B5版 本文35頁 1部100円 希望者は学会事務局(東京都千代田区大手町 気象庁内)へ申込むこと。

(内容の紹介に代えて、大気科学小委員長 山本義一教授の巻頭のことばから)

気象学が今や飛躍の発展期に直面していることは疑問の余地はありません、理由は、電子計算機による膨大な数値計算が可能になったこと、気象衛星による新しい観測が開発されつつあることによります。しかし発展の機が熟したからといって、私共気象学の研究や実務にたづさわるものが手をこまぬいているのでは何にもなりません。そこでWMOではWWWという計画を立て、気象衛星、海上のブイなどを用いて地球上の観測網の充実と通信網の強化をはかり、一方ICSUではこの情勢に即応して研究の充実をはかる計画をたてました。後者のためにGAS(Committee on Atmospheric Sciences)が作られ、そこでGARP(Global Atmospheric Research Program)なるもので立案されました。なおWMOはGARPにも深甚な関心を示し、その意向に基づき、GASは最近ICSU-WMO GARP Organizing Committeeに改組されることになりました。

本報告は1967年6月28日から7月11日にかけてSwedenのSkepparholmenで行なわれたStudy Conference on the GARPの報告の訳文であります。この会議は1. Large Scale Dynamics. 2. Trbulence 3. Tropical Meteorology. 4. Radiation 5. Technologyの5つの分野につき、専門の学者夫々約10名、あわせて50名あまり集まり、夫々の学問分野の現状並びに将来の見通し、およびそれに基づいてGARPとしてどのようなことをする必要があるかを討議した結果の要約であります。

日本からはこのStudy Conferenceに小倉、柳井、山本の3名が出席しましたが、私共はこの報告の内容は上述の分野の研究の動向を知る上に示唆に富んだものであると認め、その旨わが国の大気科学小委員会に報告した処、これを広くわが国の気象学研究者並びに気象業務担当者に知っていただく必要があるとの結論に達しましたので、本訳文を公刊することになった次第であります。